

子宝と子返し——近世農村の子育て その光と陰

Kodakara and Kogaeshi, that is, "Child as Treasure" consciousness and the "Return back child", as infanticide. Child rearing in villages in the early modern, its' light and shade

太田素子(和光大学)

1、近世の子育て・その光と陰——会津地方を中心に

1-1. 「家」のための子育てと「子どもの発見」

家訓や子育て書の歴史を調べていると、近世に入った途端に子ども期の子育てへの注意がきめこまかくなることに驚きを感じる。

15世紀から18世紀の初めにかけて、地域差階層差を含みながらも、家族の形態は全体として変化した。奉公人が自立して自ら家族を形成する可能性が広がり、農家経営の単位として直系家族(stem family)が支配的になってゆく。傍系親族や奉公人が独立し、世帯規模も縮小してゆくなかで、また子どもに家を継承する必要が自明になるなかで、親子関係は緊密化していった。近世社会では、民衆の間においても親子の深い関わり、感情の絆が形成されはじめていた。

徳川期の日本は、史上初めて民衆が家族を営み、世代を超えて家産の蓄積と家の継承が可能になった社会だった。租税を納めたあとの収益を蓄積しようと民衆の間に商品作物栽培への意欲が生まれ、「勤勉革命」(速水融)と呼ばれるような努力体質が広がった。家の継承のための子育てに対する経験的な知恵は「農書」のなかにも見られる。家業のためには気性の激しい子どもにも粘り強く柔らかく接し、協調性を大切にしながら家族労働に励めという子育ての知恵である。その典型的な表現を『会津歌農書』に見ることができる。

2-2. 近世社会の出生制限——子返し(嬰兒殺し、しばしば墮胎も含む)

筆者はマビキ(民俗語彙であることを強調する場合にはカタカナ表記)という言葉のニュアンスに驚きを感じたことから近世の嬰兒殺しに関心をもった。マビキとは苗の間隔をあけて作物の出来を良くすることだから集約農法の生みだした言葉であろう、その言葉が子育てに適用されるとしたら、「少なく産んで良く育てる」ということになるのだろうか、そのような近代的な子育て意識が近世農民のなかにめばえていたのだろうか。

子ども史の文脈から見て、出生コントロールの性格が経済的な動機によるものか、それとも能力主義社会の子育てへと移行が認められるのか、つまり「経済的マルサス主義か、教育的マルサス主義であるか」(中内敏夫)を見極めねばと考えたのである。人々が嬰兒殺しを、コガエシと呼んだかそれともマビキと呼んだのか、そのこと自体が民衆の子ども観や子育て意識を理解する上で、とくに出生制限の計画性や優勢学的関心の芽生えを問題に

する点で、大切な研究課題だと考えた。

結論から言えば、時期・地域によって変化があり農業労働の管理など計画性がまずにつれて、選択的な子育てを意味するマビキという言葉がしっくりくる状況が生まれたのであろうが、同時に罪の意識も内面化され、コガエシという言葉は葛藤を覆うためにも使われたと考えられる。大きな地域差、時間差をはらみながらも、ひろく殺生の罪を原理とする文治政治の浸透の中で、嬰兒殺しよりは墮胎へ、捨子は<捨て殺し>から拾って育ててもらふことを期待する習俗へ、「殺すより売る」という選択にもとづく貰い子の習俗や、さらには避妊の試行錯誤まで、近世中後期の農村は子どものいのちに対する近代的な感性やモラルの変容のなかで多様な試みを生み出していた。報告では会津地方に限定して時期による変化を、特に子返しの動機と罪障感に関わって簡潔に紹介したい。

2、捨子と貰子の研究へ

播州をフィールドとした研究を着手する中で、筆者がこれまで奥会津農村の地方文書や家文書の研究では正面から扱ってこなかった種類の子育て問題に出会った。一つは「貰子」であり、今ひとつは「捨子」の問題である。

沢山美果子、三木えり子ら、近世後期の山陽地方をフィールドにした捨子研究は育てられることを期待した捨子であったこと、また捨子養育の仕組みが既に藩や共同体によって形成されていたことを明らかにした。先行研究によると、捨子の原因は貧困というよりは母親の離別、父親の死別、乳不足にあるという。19世紀のこの地域の捨子を考える際家族の脆さが注目される。子返しが家を守る為の出生コントロールの性格を有していたのに対して、捨子のほうは背後にむしろ家の拡散が起こっていたのではないかと。関山直太郎は、「東国には墮胎間引き、関西を中心として西国では捨子」と指摘したことがあるが、報告では、山口県文書館に残された萩藩の記録を紹介したい。

参考文献・引用文献

- ・速水融『近世濃尾地方の人口・経済・社会』創文社 1992。
- ・太田素子編『近世日本マビキ慣行史料集成』刀水書房、1997。同著『子宝と子返し』藤原書店、2007、第2章。
- ・沢山美果子『江戸の捨子たち——その肖像』吉川弘文館 2008。同『性と生殖の近世』勁草書房 2005。
- ・三木えり子「近世後期小野藩における捨子と地域社会」『播磨小野史談』四〇号、2003。
- ・関山直太郎『近世日本の人口構造』吉川弘文館、1958。
- ・柏木恵子・高橋恵子編『人口の心理学へ——少子高齢社会の命と心』、太田「第3章 近代日本社会と子どもの命」pp. 69-85、ちとせプレス、2016、全280頁ほか。